# 令和５年度　事業報告書

特定非営利活動法人　こども応援ネットワーク

## ●そだつ事業部

### 1.　都筑区子育て支援センターPopola

これまで新型コロナウイルス感染症の影響で運営方法に様々な制限がありましたが、今年度、5 類に変更になったことで、徐々にコロナ禍以前の運営状況に戻ってまいりました。同時に、拠点に足を運べる親子の数も増えてきています。しかしながら、都筑区の出生数は令和 5 年 1,400 人となっており、毎年約 100 人の減少をしています。横浜市全域でも少子化傾向は顕著になっています。

① 子育てひろば

・ ポポラ、サテライト共に、0・1 歳児の利用が 69%となっており、全体の約 7 割を占めています。年間延べ利用児数はポポラ 12,188 人（対前年比 101.3%）、サテライトは 17,531 人（対前年比 106.6%）と、いずれも前年の利用児数をやや上回りました。
・ ポポラ：年間総利用者数 24,259 人（対前年比 101%）。新規登録者も 1,364 人と前年よりも高くなっています。「父と子どものみ」の利用も増えています。父親の利用も 1,313 人（対前年比 123%）と増加傾向にあります。
・ サテライト：年間総利用者数 35,217 人（対前年比 107%増）、新規登録者は 2,918 人でした。その他の利用者数（祖父母等）が増加しており、3 世代で利用する家族も多くみられます。
・ ポポラ、サテライト共に、プレパパ・プレママの利用が前年より減少していますが、コロナ禍が落ち着いたことで地域での妊娠期支援をする場が再開され、拠点以外での支援が増えてきたためではないかと推測します。
・ 地区別の利用割合では、ポポラは中川・勝田茅ケ崎・山田地区、サテライトは池辺・佐江戸加賀原・川和・都田地区の利用が多く、北部と南部でのすみわけができていることがわかります。ポポラは約 7 割が都筑区民、サテライトは約 8 割が他区・他市民の利用です。
・
・ ひろばでは自分らしい子育てができるように、引き続き「多様性のある環境づくり」に取組んでいます。多胎児支援や、「ダウン症児親子の日」としてダウン症児を育てている当事者母の協力を得て、気軽におしゃべりをする場を設けています。
・ NPO 法人 SCC さんとの共催でチルコロカルチャーとして、多文化交流のイベント企画もおこないました。英語とやさしい日本語を使って、「防災」「折り紙」「こどもの救命救急」をテーマに参加者同士の交流をはかりました。様々な文化や風習などがある中で、参加者がお互いを知るきっかけの場にもなりました。

・ チルコロギャラリーでは、エクアドルの民族ダンス「ディアブロ・ウマ・ダンス」をみんなで踊るWSや、ガラパゴスに住んでいる動物たちを紹介するWSを開催。
「都筑カメラ日和」では、ポポ☆メイトとして活動している水原和夫氏が撮影した“都筑のまちを切り取ったモノクロ写真展”もおこないました。ギャラリーを目的とした来場者も多く、子育て世帯以外の方が拠点に足を運んでいただける機会となりました。
また、生活介護事業所「カプカプ川和」の作品展示をする中で、ひろば開館時に作家さんが作品の修復作業をおこないました。ひろば利用者の興味関心も高く、子どもが作家さんにペンを渡したり作業を見守ったりと、交流の場にもなりました。近隣で活動している障がいのある方の作品展「ココロはずむアート展」も前年度に引き続き開催。出店団体の作家・関係者とひろば利用者の交流もあり、普段の生活の場ではなかなか接点のない方達同士が触れ合える機会となりました。

・ シニアボランティアによる季節の工作企画や、学生ボランティアと親子の交流イベントを開催。多世代との交流をはかる場を設けました。また、家族の形が多様となる昨今、その支援として「これから子どもを預けて働く家族のおしゃべり会」や「特別養子縁組家族のおしゃべり会」等、様々な家族の形に合わせて気軽におしゃべりできる場を設けました。
・ 年齢に応じた居場所づくりでは「元気っ子の日」や「のりものの日」を設け、父親の育児参加をすすめるために土曜日の公園遊びやアトリエ等のイベントも開催しました。

・ 地域で安心して子育てできるように、妊娠期からの切れ目のない支援にも取組んでいます。ポポラとサテライトでの土曜両親教室、赤ちゃんとのお世話体験会に加え、新しく「ミルクづくり体験」を実施しました。沐浴やミルクづくりを体験したいという声から実施に至りましたが、体験目的で来所された妊娠期の夫婦が、ひろば利用者の先輩父母と交流をすることで出産後の生活イメージが膨らみ、産後の不安解消へとつながっています。また妊娠期に拠点へ来所した方が、産後は自らの経験談を伝えることも多く、当事者同士がかかわる機会の創出にもなっています。

② 子育て相談
・ 専門相談については、相談件数が442件と前年比2.5倍に増えました。子の発達に関する割合が前年より3割減少していますが、「子と家族に関する相談」の相談件数は倍増しています。母のメンタル相談や多様化する家族の形により相談内容が前年よりも多岐に渡っていることが分かりました。
・ 新たに「横浜訓盲学院」と協力をし、子の視覚、聴覚の成長や発達についてのミニ講座と相談会を実施しました。視覚、聴覚障がいのお子さんが直接拠点に来所することは少ないですが、横浜訓盲学院と連携をすることで、今後拠点としてできることを検討していきたいと思っています。
・ ひろば相談では、相談傾向に大きな変化はありませんでしたが、制度、サービスについ

ての相談が若干増加となっています。

③ 子育て情報の提供

・ 養育者やボランティアと共に、情報を収集・提供する仕組みづくりとして、ロコミ情報ファイルを作成しています。「幼稚園・保育園選び」「児童発達支援事業所」等があり、テーマ別にファイリングをしてひろばで公開をしています。
・ 新たに「やってみたいつながりたいボード」を設置。「場」の設定や「聞いてみたいこと」などをボード上で質問することで、養育者同士の情報収集や発信のきっかけづくりとなっています。
・ 情報提供の工夫として、やさしい日本語と英語のチラシを作成。チラシの上部に「多言語のサイン」を記載することで、“言語に関係なく参加できるイベント”だと感じてもらえるような工夫もしています。また、二次元コードを活用してポポラ HP へ誘導する工夫などもおこなっています。
・ デジタルサイネージの活用を改めて見直し、利用者自身が情報を自然に得られるようなスライドを作成しました。次年度も内容の検討を引き続きおこなっていきます。
・ これまで発信してきた X（旧 Twitter）に加え、Instagram での情報発信を開始できるよう準備を進めています。

④ 子育て支援のネットワークづくり

・ 都筑区を 9 つのエリアに分け、親子が身近な場でつながれるよう、サロンや公園遊びなどエリア独自の活動を続けています。
・ 都筑図書館、北部児童相談所、北部地域療育センター、地域ケアプラザ等、地域の他団体との連携を継続し、地域のおまつり（さくらまつり、グルメ＆スポーツフェスタ、盆踊り、どんど焼き等）にも参加しました。
・ 地域で活動している方による「おはなし会」を開催しました。ポポラで地域の方の活動を紹介することで、地域の場に行く親子も増え、相互効果がみられました。
・ ネットワーク交流会では「子育てを地域で支援するとは」をテーマに横浜市立大学の三輪先生を招き、講義・グループワークをおこないました。支援者自身が活動している地域の社会資源の可視化をおこなったことで、参加者からは「地図を通して沢山の情報交換ができてよかった」などの声がありました。
・ 転出入の多い都筑区ならではの事業をポポラを含む区内 15 会場で実施。チルコロウィークとしてイベント週間も実施しました。区内の施設や団体（13 団体）が参加し、新たに神奈川県立荏田高校ジャグリング部の高校生も参加。拠点利用者との交流も生まれました。
・ つづき MY プラザ、NPO 法人 SCC と 3 団体でおこなう連携会議 TIF(Tsuzuki International Friendship) 発足イベントとして、DE&I フェスティバルを開催しました。Diversity（多様性）・Equity（公平性）・Inclusion（包括性）を共通の理念とし、商業施設ノースポート・モールで様々な団体と連携をしてイベントを実施しました。参加者は約 1,800 人。

スタッフはボランティアを含め約 150 人の参加となりました。

・ 企業連携として、イトーヨーカドーのネットスーパーにポポラ紹介のチラシを同梱しました。(700 部) 拠点に足を運べない方へのアプローチ方法等、今後も企業活動との相乗効果もはかりながら、引き続き連携の在り方を検討していきます。

・

⑤ 人材育成・活動支援

・ ボランティアグループ「ポポ☆メイト」は登録者数が 47 名と前年より 6 名増え、拠点外の活動（つづき MY プラザ「プラザ祭り」参加協力）もおこない、活動の幅も広がっています。

・ 利用者が自身のやりたいことを実現させていくきっかけづくり「じぶん企画」もひろばで定着し、「パパ友つくろう！」「野菜スタンプで絵を描こう」などをテーマに様々な会が開催されました。利用者が企画から開催まで携わることで、企画終了後は利用者自身の達成感にもつながり、今後の循環を生むような取組になっていると感じています。

・ 学生ボランティアと連携として、アクションポート横浜が主催する「ヤマトつながるプロジェクト」に参加。学生、ヤマト福祉財団、生活介護事業所カプカプ川和、ポポラとの連携によるアートプロジェクトを企画開催しました。2年目の連携ということもあり、日頃接点のない人同士がつながり、交流の時間を計画的に持つことができ、前年度より更に“人と人とのつながりから自然と生まれる相互理解の場”になったのではないかと感じています。

・ 新たに、短期インターン学生の受入れ（2 名）を行ない、計 10 日間インターン学生が拠点での活動をおこないました。活動の中で得た実感や子育て課題などを参考に、学生主体でイベントを実施。親子 123 人が参加しました。

・ 看護専門学校の実習を受け入れ（計 43 名)、地域子育て支援拠点の行っている事業を通じて、親子の現状や地域子育ての必要性を伝えています。

・ 地域子育て支援拠点の利用者に対する行動調査について、研究協力を行いました。実際に大学院生が拠点利用者にヒアリングを行い、神奈川区地域子育て支援拠点かなーちえ、戸塚区地域子育て支援拠点とっとの芽とも連携し、貴重な研究成果を共有することができました。今後、追加調査などにも協力をしていく予定です。

⑥ 横浜子育てサポートシステム　都筑区支部事務局

・ 令和 5 年 7 月 1 日より、新制度が開始され、利用料の改定と提供・両方会員への給付金の支払い、「子サポ de あずかりお試し券」(8 時間分の無料クーポン発行）の無料配布がおこなわれました。子育て世帯の利用促進につながり、利用会員数・コーディネート受付数共に対前年比 1.5 倍となっています。同時に事務局の作業負担が増え、人員を補充して対応をおこないました。

・ 利用会員数増加に伴い、提供･両方会員を増やすことが課題として急務になっています。提供・両方会員向けの周知として、小中学校 PTA や地域の町内会掲示板などへのチラシ配架、掲示をおこない、広報よこはまや地域情報誌への記事掲載なども積極的におこな

いました。

・ ひろばで定期的に預かりができる「ちょこっと預かり」では、預かりの様子をみたひろば利用者が子サポの会員登録につながることも増えました。(ひろば預かり 227 件中ちょこっと預かり 25 件)

・ 会員数は事務局開設後最大に増えており、コーディネート件数も併せて増加しています。

会員数　1,135 人（利用 927 人、提供 174 人、両方 34 人）※対前年比 114%

コーディネート件数　504 件　※対前年比 148%

活動件数　5,253 件（月平均 437 件）　※対前年比 158%

入会説明会　53 回　389 人参加

個別入会説明　62 回　90 人参加

出張説明会　14 回　89 人参加

⑦ 横浜子育てパートナー（利用者支援事業）

・ 個別相談　482 件　地域連携　414 件

・ 気軽に相談ができるよう出張相談を実施。都筑区社会福祉協議会が主催した「食のお渡し会」や「都筑区子ども支援団体連絡会」にも参加。拠点には足を運べない、シングル家庭や貧困家庭の当事者の声を直接聞くこともでき、連携団体との情報共有にもつながりました。

・ 個別の相談ケースに合わせて関係機関へのつなぎを行っています。都筑区だけでなく他区の保健師や子育てパートナーと連携し親子に対応しました。また、地域プラザの子育てサロンで相談日を設定したことで、ケアプラザでは対応が難しかった相談に対応することもできました。

・ 新たなネットワークの関係づくりとして、連合自治会役員会への参加や、区内施設への訪問などをおこないました。連合自治会の回覧板に拠点の広報紙やチラシを定期的に回覧してもらえるようになり、顔の見える関係づくりを進めたことで、自治会のイベントへ親子と共に参加をする機会も増えています。子育てに直接関係のない世代への周知の機会にもなっています。

・ 妊娠期からの支援として、顔見知りの少ない中で、安心して出産・子育てができるよう、当事者同士をつなぐ取組を行いました。

・ 利用者のアンケートで要望に上がっていた声より、土曜両親教室の開催時間を変更しました。これまで午後開催でしたが、午前中の開催にしたことで参加者に時間的余裕が生まれ、ひろば利用者親子と妊娠期の方の交流の時間が増えました。

・ 同じく、アンケートで要望の多かった「ミルクづくり体験」を開催。体験を通して、赤ちゃんのいる生活を具体的にイメージしてもらえる機会となりました。

## 2.　アートフォーラムあざみ野「子どもの部屋」

「子どもの部屋」の年間保育数の減少は歯止めがかからず、過去最低の実績となりました。男女共同参画センター横浜北とも何度も話し合いの場を持ちましたが、イベントの実施、保育数確保についての提案もスムーズに受け入れられることはなく年度が終了しました。
2月～３月中旬までの工事による閉館期間に、ポポラ、ポポラサテライト、縁ハウスでの研修を兼ねた勤務シフトを組みました。日頃とは違う場で、利用者対応なども新鮮に感じることも多かったようで、新年度以降兼任をすることになったスタッフもいました。急な閉館に伴う非正規雇用の職員の勤務時間確保にもつながりました。

### ①　一時保育

・ 主催利用保育 228 人（前年度 67%）、施設利用保育 108 人（前年度 59%）
・ 館内を利用する子どもの保育のみ受入可能なので、共働き世帯の増加（保育園利用児増加）、保育を必要とする方々の講座利用減少などが要因として考えられます。
・ アートフォーラムあざみ野として、保育をどういった位置づけと考えられているのか、再三申し入れ、提案を行いましたが、対策を講じるまでには至りませんでした。
・ 恒例のイベントも、産後のヨーガは事前の周知協力が得られず、人気企画のミシンでソーイングは、ジェンダー観点から当初実施すら危ぶまれました。その後、生活工房活性化、多世代交流など、実施目的を変更してようやく開催までこぎつけましたが、保育対象者からの申込はほぼ得られず、保育１名という結果となりました。

健康スタジオ「産後のヨーガ」　　6月開催　9名×4回
生活工房「ミシンでソーイング」　1月開催　10名（保育１名）

・ 保護者がリフレッシュする時間をもつこと、育休中の「はじめての保育」体験、地域のつながり、友だち作りなどの機会をつくり、施設利用者を増やしていかれるよう、昨年度から始めた「じぶん時間」というイベントを今年度も開催しました。

「ビジーボード」「ファーストシューズ」「ままごとキッチン」制作等
8回開催　33名参加　保育●名

※ひろば使用目的がルールから逸脱すること、子どものものを母親が制作するという意識を増長させる企画であるとのセンターからの指摘から、新年度から開催不可となりました。

### ②　親子のひろば

・ ママ友づくりと、子どもの部屋の利用促進を目的に実施している各イベントが好評で、継続利用や保育利用につながる方がいます。

| | |
|---|---|
| ひろば de アート | 23組 |
| オムツっこも水遊び | 11組 |
| パパ工作 day | 120組 |
| 赤ちゃん day「Grouth ガーランド作り」 | 287組（前年度 109%） |

| | |
|---|---|
| はっぴーばーすday | 191組（前年度195%） |
| 園庭解放day | 21組 |
| 手遊びしましょう | 46組 |

## 3.　縁（ゆかり）ハウス

今年度、横浜市親と子のつどいの広場補助事業、縁ハウスの運営を始めました。
年度初めから担当者を置き、物件探しからスタート。6月に横浜市から公募があり、7月に申請書提出、8月にプレゼンテーション、9月に選定結果通知、12月に開所という一年になりました。中川地域の町内会、ケアプラザ、地区センターなど、開所にあたりみなさまに丁寧に周知しながら、無事予定どおり開所することができました。

① 縁ハウス概要

所在地：都筑区牛久保2－28－2（横浜市営地下鉄ブルーライン　中川駅徒歩6分）
延床面積：91.09㎡　築34年

② コンセプト

**「地域ぐるみで子どもを育て共に生きる」**

・世代や立場を超えたつながり
・多様さに触れ、人と違うことが当たり前の中で子育てできる環境づくり
・地域を面白がって暮らせるような取組
・地元の人と共に地元愛を育み、この街での子育てや暮らしを楽しめるような支援
・地域の各施設、大学や各種団体、商店街、農家等との連携

③ 内覧会＆開所式

内覧会　：　2023年11月28日（火）、29日（水）　96名来所
開所式　：　2023年12月1日（金）
出席者：中川連合町内会長、牛久保町内会長、民生委員児童委員、
主任児童委員、中川西地区センター長、中川地域ケアプラザ所長
中川西保育園長、中川駅前商業地区振興会長、大家、法人理事

④ 利用状況（2023年12月～3月）

開所日　：　73日
登録数　：　101組
利用者数：　延べ955人（一日あたり13.1人）
地域別　：　中川地域83%、中川以外17%

⑤ ひろば（親子の利用促進）

・縁ハウスの利用をすすめるために各種イベントを実施しました。ひろば利用時に気軽に相談できる場であることを丁寧に伝えたこと、身近な相談相手となることでひろばの継続利用につながりました。

「ごろごろねんねの日」（1 歳半くらいまでのお子さん対象）

子どもの成長記念に毎月季節をテーマにした背景をつくり写真撮影

「お誕生日おめでとうの日」

お誕生日用のフォトブースで記念撮影

「ハンドメイドクラブ」

「電車であそぼう」「お面をつくって豆まき」「つるし雛」「木のおもちゃ」

「はたらくくるま」「名札ケース」などの工作

「ゆっくりさんの日」

発達に心配のあるお子さんについて先輩ママと話ができます

⑥ ひろば（地域との関わり）

・子育て家庭が地域で安心して暮らしていくためには、人と人とのゆるやかなつながりや関わり合いが大切です。縁側が「ウチ」と「ソト」をつなぐ役割を持つことから、地域の方と親子がゆるやかにつながれるように庭に「縁側」を設置しました。縁側では読み聞かせを開催し、イベントの後には地域の方と親子が縁側でお茶を飲みながら交流できる環境をつくりました。

「まちなかマーケット」（中川駅前商業地区振興会）への参加

「親子ＤＥ学食ツアー」（東京都市大学）

「縁がわひろば」（地域の方によるふれあいあそび）

「庭いじり」

「じゃがいもの苗を植えよう」「チューリップの球根を植えよう」

⑦ 子育て相談

・ひろば利用時に気軽に相談できる場であることを丁寧に伝えたことで、こどもの発達ついてなど継続した相談につながりました。

・身近な相談相手として、悩み等を気軽に話せる雰囲気をつくったことでひろばの継続利用につながりました。

⑧ 子育て情報

・地域で活動している NPO 団体等に地域情報を教えていただき、親子に提供することができました。

・地元町内会のご協力で、通信やチラシを回覧いただくことができました

・インスタグラムをはじめ、縁ハウスの事業の周知を行いました。

・地域で開催している公園あそびやおまつりなどに参加し、中川地域の「旬」な情報を届けられるよう心掛けました。

●くらす事業部

① 都筑区自立支援協議会

・こども部会の幹事として、地域活動ホーム、北部地域療育センター、北部学校事務所、放課後等デイサービス、児童発達支援事業所などの現状を把握し、障がいのある子と家族が都筑で安心して暮らせるような取組を続けました。

② 一般社団法人ラシク 045

・すべての世代を通じ「22 世紀の横浜はこうあってほしい」について、元気に自由にかつ面白く議論できるネットワークを構築するために設立した「一般社団法人ラシク０４５」での活動を継続しています。他分野、多世代それぞれの現場を持つ方々が、現場を持たないネットワークの中で、「核」をあえて作らずにまだ見えぬ未来を考えていくという手法が、今まで知りえなかったひと、場との出会いにつながり、法人の事業へフィードバックすることができています。今年度の主だった活動としては、「ヨコハマ子ども子育て未来会議フォーラム」を南部、北部、市域での開催、横浜市政策局から委託されたジェンダー平等に関するワークショップの開催、金沢区小柴インクルーシブ公園、にししば茶屋、こどもホスピス「うみとそらのおうち」の視察などを行いました。

③ 福祉よこはまの編集委員

・福祉よこはまの編集を通じて、福祉という広い分野を、毎号テーマを設けて市民にどのような切り口で理解をすすめるかなどを提案しました。特に若い世代の方々に興味をもっていただくことが必要だと感じました。